寶島異聞

中島八十一

令和八年四月、三泊四日を臺北、臺南に遊びたり。

臺灣は熱帯とは異なりて劃然たる四季の別あり。未だ四月なるに氣溫三十℃を越ゆれど、濕度低くして、至極快適なりと云ふを得む。臺灣高鐵に乘りて臺北より臺南に向ふに中途にていづくの方角に向ふや方向音痴に陷りたり。臺灣島西岸を南進する心中のマップに間違ひあるはずなきに何故方角失ひたらむと我ながら不可思議の極みなるべし。混亂の原因明らかならざれば益々混亂深みに落ちたり。

臺南安平古城を四十年前に訪れしをり、此の地の夫婦に案內を乞ひたれど、今はいづれも鬼籍に入れり。和藤內の母親平戸の田川氏の娘なるを日本語にて教授せられたる、懷しく思ひ出づ。和藤內とは人形淨瑠璃「國姓爺合戰」に於ける鄭成功の名なりき。当時東京にて開催したるアジア人の集會にて臺灣代表と韓國代表との日本語を共通語として會話したる光景は遥か古（いにしへ）のこととなれり。昨今にては言はずもがなの英語こそ共通言語ならめ。さばかりか今日臺灣にて和藤內の名知る者無く、その名聞きて國姓爺と氣付く者もまた無からん。

臺南より臺北への歸途、列車嘉義を通過する段になりやうやく方向音痴の原因明らかになれり。北回歸線嘉義邊りを通過すれば夏至の折には日の中天にかからん。四月と云へども東京にありて見るより午前の日のなかなか仰角高きに位置したり。それゆゑ午前十時の日を見て南中と誤解せり、すなはち東を真南と。

臺北に戻りて翌日余と同年配なる老朋友と久方振りの邂逅を喜び合ひ、次々と出さるる臺灣料理の一皿ごとに大陸の出自を思ひたり。或皿は福建に出自もち、別の皿四川に出自もつ。今一人の老朋友の大陸に商賣に赴きて留守と聞けば臺灣海峽の幅と東京・臺灣間の距離を比較し大陸の近きこと想ひたり。酒進むに連れ互ひに饒舌になりゆく中、朋友の日本語話す姿セピア色の寫眞を見るがごとし。問はず語りに余に語りたること纏めれば下記の如くにて、そが內容余を震撼せしむるに足れり。

―　**孫ヰルカ。サウカ、ヰルナラ結構。**

―　**小學校ニ通フ孫ガヰルガ言葉ガ通ジナイ**

―　**ナニ世代間ギャップデハナイノダヨ。言葉ガ通ジナインダ。**

―　**彼ラノ國語ノ授業ハ九十五%ガ北京語ナンダ。イキホヒ日常生活デモ北京語ヲ使ツテ居ル。ダカラコツチノ言フコトハ通ジナインダ。**

さなる話の事實なりや余は知らず。臺灣教育部の初等教育に於ける國語習得に係る通令如何様なりや余は知らず。知る要もなし。閩南語臺灣方言を解せず北京語のみ話す子供こそ我が孫ならめと一般市民の思ふ現實、今やかくの如きかと嘆息せでやあるべき。テレビラジオ通じて流るるもろもろの放送北京語になりたらん。子供書きつる作文の北京語にてやあら

ん。余口中にて呟けり「勝負あつた」。

（令和八年五月二十一日受附）